素晴らしい ――――

三池の職場新聞

ご希望がありましたので、炭労の嘱託の鈴木ふみさんに、各職場分会が発行している新聞（地域新聞も）を集めてお送りしましたところ、その読後感をお寄せいただきました。職場新聞活動者には、考えさせてくれるところが多い、と思いますので、年頭のスタートにあたり、お便りの全文を次に紹介させていただきます。　編集部

三池の職場新聞に、日本の労働者がきざむ歩みのあかしを見ました

鈴木さんの便り

職場新聞の数・種類の多さにまずおどろき、拝見して、内容がとてものびやかだと思いました。静かな確信のようなものが感じられます。

三池で、たくさんの職場新聞が出るようになっているのは比較的最近のように思われます（各紙の発行回数と号数からみて）が、新聞の発行をとくに触発するようなにかが、最近あったのでしょうか。どの新聞も、おもしろいと思って読みました。

おしつけのない民主的な雰囲気も、すばらしいものだと思いました。職場の人たち（おそらく、新労組の人たちも）も、おそらく楽しみにしているのではないでしょうか。

月一回発行が大勢のようですけど、二回出すのはやはりたいへんなのでしょうね。

はたして、同じ炭鉱の他のやまの様子はどうでしょうか？

三池の職場新聞をみていると、やっぱり三池は労働組合だというのが実感ですが、日本の労働組合運動が、全体として労働組合だといえるようになるのは、今後どういう曲折をへてからなのでしょうか。近くないかも知れないが、遠くないかも知れない、その日に向かっての一日一日のなかで、やはり三池炭鉱労働組合のきざむ歩みは、日本の労働者の生きるあかしのひとつだとおもいます。

×

鈴木さんへの連絡先は、「東京都中野区中央三丁目九―二、炭労本部」です。お便り、たいへんありがとうございました。

詩による職場からの報告

三川坑木

本所指導部　杉野栄治

にぎやかなセミの鳴き声遠ざかり
今日も　明日も　また
いやな冬がやって来た
去年の冬は耐えたけど
あれこれと
つらい想い出残るだけ

水たまりに氷ははり
広い土場の朝霜踏んで
そのまん中に
ベンガラ下げて今日も立てば
有明海の潮風が
俺たち目がけて吹き上げる
こらえ切れずに坑木の
山積にかくれ身ぶるいすれば
汚れたヒゲ面が痛くなる

木の葉も落ちて　そのあとに
ミノ虫だけが生きている
土場のまわりには
白毛になったススキの涙が
風にくるって舞いじゃくる
ボタ山の中から生き抜いた
セイタカアワダチ草
その公害を身にかぶり
疲れとホコリにドロまみれ
綿帽子かぶって泣きあかす

ここは禁煙火のないところ
耳タブは次第に赤くなり
カラスがカアカア鳴く声に
寒さがジーンと身にしみる
スクラム組んでほほえんだ
ここは三池闘争の戦跡地
ああ　今も
三池の火が燃える。

※　　※

八〇年代の労働運動の課題

職場から闘い起こそう

労資協力路線をはねのけて……

四山指導部　宮崎　勝

七〇年段階における政府・独占資本の〈構え〉は、何によって特徴づけられるかといえば、職場組織の空洞化であります。つまり〈資本の安定帯〉を、職場にどうつくりあげていくか、であったと思います。

独占資本は、一九七四年の国民春闘の高揚と、参議院議員選挙における低落傾向の強まりから、自民党一党の支配体制に危機感をもちはじめ、それでもその支配を維持するために〈経済新路線〉なるものを高唱しはじめたのであります。

たとえば、このようにのべています。

「日本の経済は従来、規模の拡大による成長路線を走んできた。しかし今日においては、それは限界に達し、新しい路線を開拓する必要にせまられている。そして、この新路線が開拓されるまでの間政・労・使は相協力して、低成長経済にともなうさまざまな経済困難に耐えていかなければならない。……それは過去のような、規模の絶えざる拡大を追求する路線をやめ、量の拡大よりは質の向上、素材の増産よりは加工度の向上によって、生産を上昇させることでなければならない。

そして第一に、インフレの脅威なき社会、公害なき社会、適正雇用の社会を建設すること。第二に省力、省エネルギーに徹し、無駄の排除によって生産性を向上させること。第三に、国際経済の視野から見ること、などを実現しなければならない」

労働者は、生産性向上に協力しろ。〈日本丸〉を守るためには、労資の話し合い路線を強化しなければならない、というのです。

こうした状況のもとでの政府・自民党・独占資本の方策は、一九七五年の百九十時間余におよぶスト権スト、田中（元首相）逮捕を機に、いよいよ露骨、かつ鮮明になってきました。

〈七六年度版日本の労働経済事情〉（日経連発行）では、わかりやすくいえば、労働者が首を切られ、生命と権利の不安にさらされたりする。そんな〈自由〉（資本の）を守る基礎は〈職場の安定帯〉（労使話し合い路線）であるというのです。

そして日経連の〈構え〉は、七八・七九春闘でいっそう明白なものとなっていきます。反合理化闘争を熱心に闘う労働者を、職場から放逐しなければならぬというのです。

それはなぜか。それは日々の闘いを通じて労働者階級を訓練し、結集し、組織するばかりでなく、労働者階級と資本家階級との対立関係を自覚させ、階級意識を高めずにはおかないからです。

結論は、おのずから明らかとなります。日経連が目指す〈職場の安定帯づくり〉に抗して、階級的労働運動の道を守ることであります。指導部、活動家の一人ひとりが献身的に、ねばり強く闘い、労働者の意識をひき出し、高めていくことであります。理論と実践の統一（学習と、職場の反合理化闘争）を自覚的におし進める階級意識を身につけることであります。

つまり、三井独占資本の〈労使話し合い路線〉を暴露し、闘っていくことであります。これが、八〇年代におけるわれわれの課題であります。

情勢のきびしさは、それだけ独占資本の崩壊がせまっていることです。

職場文芸集

詩　夕映え

三川指導部　平田光男

恒例の委員旅行
行く先は
小浜
備蓄タンカー
うれしげに停泊
落日が海面を照らす
石油
石炭
地球の資源
無限ではない
俺達の青春は
太平洋戦争で
消されかけた
今の若者達とは
省エネルギー

夕日が旅館の窓を
とうして
沈黙の中に
山影に消えて行く

短歌

三川指導部　町佳郎

ささやかに新年（とし）迎えんと部屋ごとに小さな子餅など飾りぬ
妻と
門松のなきわが家にも訪れぬみたり子の待ちし元日の朝
縁窓ゆ見る庭隅のさざん花の彩（いろ）たおやかに年新たまる

三川指導部　平田光男

座り込み寒気ひしひし迫り来るビニール小屋に籠ぞ降る
雨強く風吹きつけるその中に座り込みをぞ泰然となす
遺族の顔眉もりりしく澄む瞳正しき歴史書きしるさむと
「御苦労」と声かけて行く仲間あり連帯感をあらわに出して

俳句

三川指導部　町佳郎

しののめを新年（とし）の若水汲みにけり
元日やしめ飾りもなきわが家かな
井戸に供う餅とお神酒や初春（はる）の風

三川指導部　島潮路

目玉
年始回り三軒よりは千鳥足
有事法死の商人のプログラム
お年玉年始で稼ぐ皮算用
ボーナスでキャッシュ払いの客となる

川柳

三川指導部　町佳郎

こよいほど
静かに
夕日が落ちて行くのを
みた事はない。

×

平田さんからは、ほかにも詩の投稿がありましたが、この方を紹介させていただきました。

三川指導部　I・M生

坑嶋に無事故を祈る飾り餅
今日もまた笑顔でおくるウチのママ
「タダイマ」で家族の顔がホッとする